

イブシ銀の良さ

戸崎 誠喜

一橋当時の私を、目立たぬ学生だった、と評する人がいたが、その私から見てさえ、一橋在学当時の大平正芳君は、おそらく私以上に、全く目立たぬ存在だったと思う。同年代の同学。青春の一時期を共に過ごしたのは確かだが、正直にいうと、当時の大平君について私には格別の記憶がない。政治家大平正芳が、政界で頭角をあらわし活躍しはじめてから、人にいわれて「そつか」と知ったぐらいである。だが、そうとわかればその時点から、もう赤の他人とは思えなくなるものだ。

商社マンとして海外の生活が長かった私だが、日本からのニュースのなかで、大平君の政界での「成長」を見るにつけ聞くにつけ、やはり嬉しかったし、また奇妙な懐しささえ感ずるようになっていた。人間の感情とは、全く面白いものだ。そして同窓の集い「清友会」に、大平君を「ゲスト」として定期的に招くようになってから、私は彼の人柄に触れた。思い返してみても、そつした席での大平君の言動は実直そのものだった。およそ、いわゆる政治家臭は微塵も感じさせなかった。はっきりいって、私は彼のそついうところに強く惹かれた。こういう政治家ならいい、こういう政治家こそ、日本を託するに足りると、会つたびに私は満足していた。

静かに酌み交わし、よもやま話で一刻を過ぎす淡泊な集いで、またこの会合以外には交際らしい交際もなかったが、仄聞する彼の日常も、「信ずべき友」への私の確信をますます深めた。グズ、鈍牛、村夫子、そんな悪口をみると、そんなことをいう人達には彼のイブシ銀の良さがわかっていないのじゃないかと、わがことのように

にハラが立った。政治の世界のことはよくわからないが、私は、とにかく彼の人柄を信じ、期待したのである。その彼が、業半ばにして急逝した。

非運は言語に絶する。どうして、こういうことになるのか。天命は彼にあまりに苛酷に過ぎないか。いまこうして、彼を悼む言葉を書き綴りながらも、その思いを禁じ得ない。おそらく、歴代首相のなかにも、これほどの非運の例はあるまい。その死より遡って、七九年秋の総選挙を考えても、そこに非運の先触れを見る、という人もいた。投票日に台風が直撃した前例もないからである。確かに、その結果としての総選挙敗北が、党内情勢の複雑さに拍車をかけ、国会情勢をますます困難にし、彼の心労をいやが上にも増幅した。さらに七九年暮れから八〇年前半にかけ、国際情勢の動きもただならぬものがあり、国運を預かる首相として、一瞬も心休まる暇はなかったに違いない。そして、局面一新のために異例の衆参両院重複選挙への決断。

自ら信ずるところに踏み出し、結果を見届けることなく、彼は卒爾と他界した。

愚痴とも思えるが、政界に進まなければ彼はもつと長生きしたに違いない。序を尊び情を重んじ、そしてバイブルの説く人間愛に共感した彼にとって、政界に棲むその日々がそのまま、内面の責め苦となって続いたのではあるまいか。故郷の豊かな自然のなかでの晴耕雨読の日々。為すべきことを為し終えたら、と、おそらく彼は義務のなかでもその日々を夢みていたに違いない。本来はそれこそが、彼の内なるものに最もふさわしいものだったろう。その日々が、ついに訪れなかったことを悼む。悼んでもなお悼み足りない。

が、それはあくまでも私情というべきかも知れない。大平君は、日本という国の非運を自ら背負って、明日の日本の「強運のスウィッチ」を入れるために、この世を去ったのだと、私は考えている。その生は非運に卒えても、その死は指導者として為すべき全てを為しきった結果、と思えるからである。

(伊藤忠商事社長)